和歌山のみかんと福祉の連携で果実の幸せUP

「栽培や消毒、肥料などは専門の職員が行い、収穫や出荷を利用者が行います」と社会福祉法人有田つくし福祉会早月農園施設長の泉さん。

自然の中で楽しそうに働く利用者たち。屋外での農作業で、これまでよりよく眠れるそう。

社会福祉法人 有田つくし福祉会 早月農園

住所／有田郡有田川町尾上13-1
電話／0737-34-2008

これから旬を迎える果実の〝みかん〟。和歌山県は18年連続で収穫量日本一位を誇る。とはいえ他の果実栽培と同様に、耕作地と担い手の維持には多くの課題がある。「みかん畑は斜面にあることが多く、栽培や収穫は重労働です。高齢の生産者には農地の管理は大変なんです。さらに継承者の不足などで、耕作放棄地が増えています」と語るのは早月農園施設長の泉秀和さん。

「福祉施設として、障害がある利用者の支援はもちろんですが、地元の人たちの役に立つことも重要です。だから地域の農地を維持するという意味も兼ね、何らかの理由で生産者が農業を続けられなくなった場所を施設で借り受けたりしています」。こうした取組は農福連携といわれ、農林水産省と厚生労働省の主導で進められてきた。地域の課題を福祉の力でカバーする、ウィンウィンのいい取組のように思うが、当初の認識は違ったという。「農業という大変な仕事を障害がある利用者に押し付けるのか?と思いました。しかし実際には全く違い、今までの作業と違って、農業などの仕事をしている時の方が楽しそうなんです。また、雨や風で収穫などができないと寂しそうなんですね。もちろん人それぞれなので、他の仕事が楽しい人もいます。どちらにせよ利用者は〝仕事をする〟という形で、社会との関わりを持つこと、仕事に携わることが楽しいのですね」。

福祉施設として地元との関係性は重要である。維持できなくなった農地を高齢の生産者に代わって活用する。収穫した農産物は、そのまま出荷したり、ジャムなどに加工・販売され、利用者の大切な収入源となる。そういう意味で農福連携は、農業が抱える課題解決のひとつの手法となるかもしれない。

早月農園では、温州みかんの他、八朔や夏みかん、三宝柑などの柑橘類を栽培。他にも5～6月の主力として、南高梅やぶどう山椒など、和歌山らしい農産物を栽培している。また、春にはブロッコリーや玉ねぎ、ジャガイモなど、そして夏野菜としてなすやきゅうり、ししとうなど多品目を栽培している。社会福祉施設の利用者たち自ら手作業で収穫し出荷する。

みかんの健康ポイント

抗酸化作用のある水溶性ビタミンであるビタミンCは、皮膚や粘膜の健康維持を助けるとともに美肌効果も期待できます。また、βークリプトキサンチンは、カロテノイドの一つで、骨代謝の働きを助けるといわれています。

一般的にみかんと呼ばれているが、多くは〝温州みかん〟を指すことが多い。和歌山県は収穫量日本1位で、特に有田地方は400年の歴史と伝統を誇るみかんの産地として有名である。